

## 「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈11月14日（金）放送分〉

### テーマ「奄美の民話や昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第2金曜日にお届けする、「奄美の民話や昔話」シリーズの第8回、沖永良部島の昔話「坊主と小僧」です。

昔、あるお寺でお坊様が小僧さんを使っていました。その小僧さんは毎日毎日、たとえ雨が降っても風が吹いても、山に行っては薪拾いをしていました。

ある日、小僧さんが深い山奥に入っていったところ、1軒の家がありました。小僧さんが家の中を覗いてみると、それはそれはとても美しい女が一人いました。女は小僧さんに気付き、「もし、お兄さん、お兄さん、私はこんな山奥に一人で住んでいます。それでお婿さんをもらわなければならないのですが、もし良かったらあなたが私のお婿さんになってはくれませんか。」と言いました。小僧さんは驚いて、「本当に私を婿にしてくれるのですか。」と尋ねると、女は、「そうですよ。本当に私のお婿さんになってほしいのです。」と答えました。小僧さんは女があまりにも美人だったので、とうとう惚れてしまい、女と夫婦になる約束をして寺に帰っていきました。

お寺に帰ってきた小僧さんはお坊様に、「お坊様、お坊様。今日、山奥に薪を拾いに行くと、美しい女がいる家があって、私はその女と夫婦になる約束をしてきました。果たしてそのような約束をして良かったのでしょうか。」と尋ねました。お坊様は、「小僧さん、小僧さん、それは考えものだよ。そんな山奥にたった一人で住んでいる女を自分の妻にするなんて…。何やら危ないことではないかね。」と答えました。小僧さんは、「そうですか…。でも、あの美しい女を見てしまったからには、自分の妻にしないではられません。」と言いました。お坊様は、「うーん。私はとても危ないことだと思うが、お前がそこまで行きたいのならば、女の家に行ってください。ただし、私が袋を縫ってあげるから、それを持っていくのだよ。お前が行ってみて、もし危ないことがあったら、私が持たせるその袋を使いなさい。そして、もしその家から逃げられなくなったときには、その袋をお前の身代わりにすればよい。」と言って袋を二つ縫って、小僧さんに持たせてあげました。

小僧さんは二つの袋を持って、美しい女がいる山奥の家へ行きました。すると女は待ち構えていたように、「さあ、さあ、ようこそ来てくれました。こっちへお入りください。」と小僧さんを家に招き入れました。ところが女の家は、いったん中に入ると簡単に逃げ出せないような造りになっていました。しばらくすると女は急に態度が変わり、「あんたは、そこで待っていなさいよ。」と言って部屋を出て、念入りに2回も鍵を掛けていきました。小僧さんは、「お坊様が心配していたとおりになった、あの女はきっと鬼なのだ…。今頃女はガシガシと歯を研いでいるのだろう。」と思いました。小僧さんが、「ああ、もう私の命はおしまいだ…。」とっていると、鬼になった女が帰ってきて、「お前を食べてやるぞ！」と言いました。小僧さんは、「あっ、急に便所に行きたくなった。せめて私を便所に行かせてから食べてくれ。」と答えました。鬼は、「何、便所に行きたいだと。わしがもう食べようとしているのに、便所に行く必要はないぞ。」と言いました。小僧さんは、「便所に行ってからでないと、美味しく食べられないぞ。もし私が逃げると思うのなら、私の手をひもで縛って、お前がそれを握っていればいい。」と答えました。鬼は、

「それなら、お前の手を縛ろう。」と言って小僧さんの手を縛り、便所に行かせました。

小僧さんは、便所に入るとすぐに自分の手を縛っているひもをほどき、お坊様が持たせてくれた一つ目の袋を縛りました。さらに袋に向かって、「袋よ、袋。鬼が話しかけてきたら、私の代わりに返事をしておくれ。」と言って、便所から家の外へ逃げ出しました。

鬼はずっと待っていましたが、小僧さんはなかなか帰ってはきません。鬼が、「小僧、小僧。まだかあ、まだかあ。」と呼ぶと、「まだだ、まだだ。」と一つ目の袋が返事をしました。鬼は、「いつまでかかるのか。」と怒ってひもを引っ張りました。鬼がさらに強くひもを引っ張ってみると、ひもの先にはただの袋が縛ってあるだけでした。鬼は、「うーん、これはしまった。こん畜<sup>おこ</sup>生め…。あの小僧、どこまで逃げたか…。追っかけて食ってやる。」と、家を飛び出し、小僧さんを追いかけました。

その頃、小僧さんはずっと先まで逃げていましたが、鬼はとても足が速く、もうすぐ小僧さんに追いつきそうでした。小僧さんは、鬼が段々と近付いてくるのが分かったので、お坊様からもらっていた二つ目の袋を後ろに向かって放り投げました。すると、小僧さんの後ろには激しい炎が上がり、辺りはたちまち大火事になりました。さすがの鬼もこれには驚き、戸惑<sup>とまど</sup>いました。小僧さんは、その隙<sup>すき</sup>にお寺に帰ることができました。

寺に着くと小僧さんは、「お坊様、お坊様。あなたがおっしゃるとおりでした。もう少しで私は鬼に食べられるところでした。」と言いました。お坊様は、「だから、私が危ないと言っただろう。さあ、この中に入りなさい。」と言って、小僧さんを大きな木箱の中に入らせ、寺の門の上に下げ<sup>さ</sup>槍<sup>やり</sup>を仕掛けておきました。

しばらくすると寺に鬼がやってきて、「おい坊主、ここに小僧は来なかったか。」と尋ねました。お坊様は、「いや、まだ帰ってこない。」と答えました。鬼が、「うーん、小僧が帰ってきたはずだが…。」と言うとお坊さんは、「いやいや、帰ってくるのは、まだしばらく<sup>あと</sup>後だろう。」と答えました。鬼は、「はて…、小僧を追いかけてきたが、それならばもう帰ろう。」と言ってお寺の門を出ようとしてしました。その時、お坊様は下げ<sup>さ</sup>槍<sup>やり</sup>の仕掛けを素早く切り、槍が刺さった鬼は死んでしまいました。

木箱の中から出てきた小僧にお坊様は、「ほら小僧さん、分かっただろう。すべて私が言ったとおりであったな。」と言いました。小僧さんは、「はい、そうです。大変なことでした…。お坊様のお陰<sup>かげ</sup>で命が助かりました。これからはあなたを命の恩人だと思って、一生懸命<sup>ほんごう</sup>にご奉<sup>ほう</sup>公<sup>こう</sup>いたします。私が妻をもらうときも、あなたのお世話になりたいと思いますので、どうか末<sup>すえなが</sup>永<sup>えい</sup>く面倒をみてください。」と答えました。

こうして小僧さんは、お坊様のお陰で良い暮らしをしたということです。

さて今回のお話はいかがでしたか。小僧さんの身の危険を案じ、二つの袋を準備してあげるお坊様が素敵でしたね。鬼の方もお坊様を食べようとはしなかったのも、もしかすると特殊な能力をもったお坊様なのかもしれません。

このように奄美図書館には、郷土に伝わる昔話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。